

解答

- ① 1 熱い 2 持久 3 仏教 4 阪神 5 年輪
 6 試験 7 養う 8 念願 9 天井 10 望遠鏡
- ② 問一 1 [主語] ア [述語] オ 2 [主語] × [述語] オ
 3 [主語] オ [述語] ア 4 [主語] × [述語] ウ (それぞれくんで)
 問二 1 はな・キ 2 き・イ 3 あぶら・カ
 4 ねこ・エ 5 すずめ・ア 6 あおな・ウ (それぞれくんで)
- ③ 問一 A ウ B エ C イ 問二 1 映像や音 2 文字 3 頭で想像
 問三 テレビの映像に映らない部分の情報を説明して伝えること。
 問四 1 A 新聞社の人 B テレビ局の人 2 A ウ B オ
 問五 イ 問六 エ
 問七 1 ア・オ (くんで不順可) 2 ウ 3 イ 問八 テレビ・ラジオ (くんで不順可)
 問九 地震や台風、テロなどの危険な情報をいち早く伝えて、命を守る対策ができるようにすること。
- ④ 問一 A ウ B エ C ア
 問二 他の動物と 問三 ウ 問四 五万年くら～されている [から。] (くんで)
 問五 ウ 問六 イ・ウ (くんで不順可)
 問七 1 言葉
 2 ホモ・サピエンスは言葉で知識を集積することで世界を生活しやすい環境に近づけて、高度な文明を発達させることができたから。
 問八 イ 問九 イ

解説

- ③ 出典は、池上彰「これで世の中わかる！ ニュースの基礎の基礎」〈大和書房〉。
- 問一 A…空欄の前後で食い違う内容が書かれているので、逆接の「でも」。B…空欄の後に「大きな事件や事故について」と具体的な状況を挙げているので、例示の「たとえば」。C…空欄より前の内容をまとめていますから「つまり」が入ります。
- 問二 傍線部直後に、「テレビは映像や音と一緒に伝え」とあり、新聞は「基本的な情報は、文字を読むしか」なく、読みながら「頭で想像しなければ」ならないとあります。
- 問三 傍線部の前後の内容をまとめましょう。アナウンサーやキャスターは、「映像に映らない部分」を「説明して伝えている」のです。「映像や音は、文字以上の詳しい情報を持っている」だけでなく、アナウンサーやキャスターが解説までしているのです、新聞に負けていないと言いたいのです。
- 問四 1…「どちらの」というのは、「新聞社の人」(8行め)と「テレビ局の人」(11行め)の意見です。
 2…「新聞社の人」の意見は、「新聞ならいつでも読み返せる。内容も新聞のほうが詳しい」というものです。「テレビ局の人」は「ビデオやDVDに収録しておけば、いつでも見直せる」、「映像や音は、文字以上の詳しい情報を持っている」と主張しています。
- 問五 新聞では「話をしてくれた人」が「自分であることを知られたくない場合」には「Aさん」という言い方で名前を隠せます。しかし、テレビでは「誰だかわかってしまう」ので、話してもらえるように説

得したり、顔がわからないように撮影したり、声を変えたりするなどさまざまな努力が必要になります。

問六 新聞は、さまざまな記事の見出しをいっぺんに見ることができ、どんなニュースがあるのかすぐに「つかむ」（把握する）ことができます。

問七 「テレビ」は、映像に加えて解説を付け加えることができる点とニュースの原稿部分は字数にすると意外にわずかである点、「新聞」は、さまざまな記事の見出しからどんなニュースがあるかすぐわかる点、「ラジオ」は何か別のことをしながらでもニュースを聞くことができる点の特徴として挙げられていました。

問八 「放送」の決定的な特徴は「速報性」です。「新聞」は一日二回の発行ですからこの点で劣ります。「テレビ」「ラジオ」はその日におきたことをその日に知ることができますね。

問九 「速報性で特に大きな役割」とは、地震や台風、テロ事件などの危険に関する情報を、いち早く伝えることです。情報が伝われば対策を立てることができ、人の命を救えるのです。

④ 出典は、金田一秀穂「15歳の寺子屋 15歳の日本語上達法」〈講談社〉。

問一 A…ホモ・サピエンスが「数も少ない」「圧倒的に力も弱い」という状態で生き延びてきたようすなので「ほそぼそと」。B…ホモ・サピエンスが「世界中に散らばっていくのと入れ替わるように」、旧人類が姿を消したとあるので「あちこちで」。C…それまで弱い動物だったホモ・サピエンスがほかの動物を圧倒するように強くなったので「滅多やたらと」。

問二 ホモ・サピエンスの体つきは「他の動物と違って体毛のない～ヘンな動物」と書かれています。

問三 数が少なく、他の動物より圧倒的に力が弱い動物のことなので「絶滅危惧種」。

問四 傍線部直後に「なぜ、そんなことがわかるのかといえば」と理由を説明しています。

問五 17～19行めに示されている疑問について、筆者は「この疑問には、ひとつの仮説が成り立ちます」（20行め）と述べたあと、その仮説について21～23行めで説明しています。

問六 「そんな手強い相手」の「相手」とは「ネアンデルタール人」のことです。ネアンデルタール人は「骨格的にはホモ・サピエンスより、はるかに遅し」（25行め）く、「火を使うことができたし、石器を使う知恵も持っていた」（26・27行め）のです。

問七 1…「ホモ・サピエンス」は「化石に残らないようなすごい武器を持っていた」のです。それはおそらく「言葉」だろうと筆者は考えています。2…なぜ「言葉」が強力な武器になったのでしょうか。「言葉があると知識の集積ができ」（34行め）、その「知識を、子どもや孫に伝え」、「どんどん知識が増えていき、それを実行することで世界はホモ・サピエンスの生活しやすい環境へと近づけることができ、「文明をここまで高度に発達させることができた」のです。

問八 前半はホモ・サピエンスの誕生が約二十万年前であり、他の動物と比べるととても弱い存在で、「絶滅危惧種」であったが、五万年くらい前から突然強くなり、旧人類たちを滅ぼしたということが語られています。後半は弱い動物であったホモ・サピエンスが強くなった武器は「言葉」であったことを説明しています。話題転換の「では」に注目しましょう。

問九 「五万年くらい前のホモ・サピエンスの化石が世界中から次々と発見されている」（13・14行め）→ア○。「ぼくたち人間が学名ホモ・サピエンス（ヒト）という動物である」→ウ○。「言葉を持っていたからこそ、ホモ・サピエンスはこの五万年間で文明をここまで高度に発達させることができた」→エ○。「ホモ・サピエンスがそれまでネアンデルタール人や、北京原人、ジャワ原人の住んでいた地域に侵入して、彼らを絶滅させてしまった」（21・22行め）→イ×